大妻多摩中学校

二〇二六（令和８）年度

入学試験問題（第四回）

【国　語】

時間　50分

2月4日（水）

【注意事項】

1　問題は22ページまであります。

2　指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3　答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4　句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5　ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

本書執筆中に、生まれてはじめて近距離の落雷を経験しました。夏の終わり、雨の勢いがあまりにひどく雷鳴も聞こえ始め、私を含めた数十人が駅の改札口で雨が落ち着くのを待っていました。その時です。①辺り一面が一瞬、目もくらむような白い光に覆われ、「バリバリ、ドッカーン」という大きな音が鳴り響きました。今まで聞いたこともないような音と光で、命の危機を強く感じました。気象庁のホームページで調べると、ほんの数百メートル先に落雷したことがわかりました。雷は、激しい音や光に加え、命や財産を奪うこともあるため、今も昔も怖れられています。この雷をもたらすのが積乱雲であるため、大雨で大地を潤し、農作物を育てる恩恵ももたらすことから、世界中の人々に多大な影響を与えてきました。

雷が電気であることなど、そのメカニズムが証明できたのは比較的近年で、18世紀半ばのベンジャミン・フランクリンの実験からです。その後、20世紀に、雲の中で小さな氷の粒がこすれあって、プラスとマイナスの電気を帯び、それが放電して雷となることがわかりました。物をこすると発生する静電気の存在は、古代ローマから知られていたり、古代中国で陰陽五行説を基礎として解釈されたりもしましたが、主に、雷は世界でも日本でも長く神の仕業として考えられてきたのです。

ヨーロッパ圏では、ギリシャ神話のゼウス、ローマ神話のユピテルが最高神として存在し、雷を含む天候すべてを操ります。北欧神話の雷神トールも同じく位の高い神。雷は神がつかさどり、②人に与える罰や神の意思などとされてきました。

西洋絵画では、宗教画や（注1）寓話絵などに、ゼウスやユピテルが登場します。ゼウスが手に握っているのは、雷を操る杖や矢であったり、雷そのものです。神々とともに、背景に稲妻が描かれている作品も非常に多くあります。

中国では紀元前から雷神のもとになったと思われる伝承話が残っていますが、第4章で紹介した中国の1世紀頃の書物『論衡』には、いくつもの連なった太鼓を引き寄せて、ばちでたたき、［③］を出す力士のような雷公が紹介されています。これをもとに、中国の壁画に風神雷神が描かれ、それが日本に渡り、8世紀奈良時代の《絵因果経》に描かれます。周囲にいくつもの太鼓があり、体はほぼ人間の姿です。

今も残る13世紀半ばの鎌倉時代に作られた三十三間堂の国宝、風神雷神像は、インドの自然神がモチーフのはずですが、日本風にアレンジされています。《絵因果経》と同じく太鼓を背負っており、筋肉隆々の人の姿に近いデザインです。

13世紀、鎌倉時代の《北野天神縁起絵巻》では、雷神は角が生えた赤い肌の鬼の姿で描かれます。これは、平安時代の９３０年、(注2)清涼殿に雷が落ちて、公卿・官人が数人亡くなるという歴史的な大事故を描いたものです。この雷は、晩年不遇のまま亡くなった官僚の菅原道真の怨みであるとされました。道真は怨霊となったとされ、雷神として鬼の姿で描かれています。ちなみに、雷が落ちそうな時に「［　④　］」と唱えるのは、道真の領地桑原には雷が落ちないと考えられてきたことからきていると言われています。その後も鬼の姿をした風神雷神はしばしば描かれ、江戸時代には様々な絵師によってアレンジが加えられて、俵屋宗達や尾形光琳などの《風神雷神図屏風》といった傑作も生まれます。

このように⑤日本では、雷の神は多様で姿も様々。『古事記』に出てくる伊邪那美から生まれた神の火雷神、地域ごとに伝承される空の上に住む雷さまなどもあります。

さらに、⑥江戸時代に入ると雷獣や雷鳥などが盛んに描かれていきます。

雷獣は、木に雷が落ちると、爪痕のような裂け目ができることから考えられた、⑦架空の生き物です。多くの書物で、タヌキやイタチといった爪の鋭い小動物のような姿で紹介されています。曲亭馬琴の著書『玄同放言』では、形態はオオカミのようで前脚が２本、後脚が４本あるとされ、尻尾が３股に分かれた姿で描かれています。また『信濃奇勝録』には、子犬のような丸っこく一見、かわいらしく見える姿で紹介されています。

また雷鳥は、冷涼な地域に生息するキジ科の実在する鳥で、日本では北海道と中部山岳地帯に生息しています。古くは、れいのとり、霊鳥であるとされていましたが、江戸時代に雷鳥、ライチョウと呼ばれ、雷と結び付けられるようになります。雷が鳴る時に活発に動く、雷獣を食べる、などと言われ、主に雷避けのシンボルになりました。雷鳥は、記録用として写生図になった他、鑑賞用としても描かれました。「松に雷鳥図」というモチーフが好まれ、様々な流派の作品が残されています。私が大学生の時に住んでいた信州では、今でも「雷鳥の里」が代表的なお土産で、包み紙に雷鳥のイラストが描かれています。とてもおいしーいウエハースで、

私もよく買ったものです。

西洋では、18世紀頃から気象学などの誕生とともに、神や伝説から離れた自然観察の一つとして雷も描かれるようになっていき、19世紀は、気象学者によって、雲や雷の研究が盛んに行われはじめたものの、まだ伝統的なモチーフが主でした。

日本では、江戸時代になると前述した⑧北斎の《冨嶽三十六景　山下白雨》に代表されるように、雷そのものを描いたものがいくつか見られるようになります。画面の奥には、雷をもたらす［⑨］が無数に描かれ、その雲に覆われたであろう手前の山肌は暗くなっています。右下には大きく稲光が描かれており、非常にインパクトのある作品です。北斎自身落雷に遭って、その後、絵が売れ出したという話もあります。落雷を経験した可能性はありそうで、その迫力を表現したかったのかもしれません。また、一瞬の稲光を捉えたかのように不規則なジグザグで描かれており、北斎がいかに空を［⑩］していたのかを思わせます。⑪現代のマンガなどにも通じる表現ですね。

（長谷部愛『天気でよみとく名画　フェルメールのち浮世絵、ときどきマンガ』〔中公新書ラクレ〕より）

（注1）寓話絵――視覚的な要素を通じて、特定のメッセージや教訓、思想、道徳的な価値観を伝えることを目的としている絵画。

（注2）清涼殿――平安京の内裏にあった天皇の日常の居所であり、儀式や政治が行われた場所。

問1 ――線部①「辺り一面が一瞬（いっしゅん）、目もくらむような白い光に覆（おお）われ」とありますが、この自然現象の仕組みが説明されている一文を抜き出し、最初の七字を答えなさい。

問2 ――線部②「人に与える罰（ばつ）や神の意思などとされてきました」について。雷は脅威（きょうい）であると同時に、ありがたいものでもありました。その理由を以下のように説明する場合、［X］・［Y］にあてはまる語を、本文中よりそれぞれ指定字数で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

雷は［X（二十二字）］が、一方で、［Y（二十三字）］存在だから。

問3 ［③］に入る語句として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雷神　**イ** 雷鳴　**ウ** 稲妻　**エ** 落雷

問4 ［④］に入る語句として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア くわばら、くわばら

イ かみなりさん　おへそをかくせ

ウ はこう、はこう、鬼のパンツ

エ どっぴんしゃん

問5 ――線部⑤「日本では、雷の神は多様で姿も様々」とありますが、「雷の神」の説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三十三間堂の風神雷神像には、インドの自然神に似せた筋骨隆々の力士のような雷神が描かれている。

イ 《北野天神縁起絵巻》には、赤い角が生えた菅原道真そっくりの雷神が、清涼殿に雷を落とす場面が描かれている。

ウ 俵屋宗達と尾形光琳が共同で制作した《風神雷神図屏風》には、雷神とともに雷獣が描かれている。

エ 《絵因果経》には、中国の壁画をもとにしたような、周囲に太鼓がある、人間に近い姿の雷神が描かれている。

問6 ――線部⑥「江戸時代に入ると雷獣（らいじゅう）や雷鳥（らいちょう）などが盛んに描かれていきます」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「雷獣」の説明として最も適切なものを、**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『古事記』に登場する神の火雷神とともに、空に住むと伝えられてきた。

イ 雷鳴はオオカミの鳴き声だと信じられていたことから生まれてきた。

ウ 雷が落ちると木にできる裂け目が、動物の爪痕に似ていることから考えられた。

エ 稲光の分かれ方が動物の尻尾に見えたため、変身したと考えられていた。

(2) 「雷鳥」は、江戸時代に雷と結びつけられ、人々にとってどんな存在となっていましたか。その特徴（とくちょう）とともに、本文中の言葉を用いて三十五字以内で説明しなさい。

問7 ――線部⑦「架空（かくう）」とありますが、反対の意味で使われている二字の熟語を――線部⑦の直後の段落から抜き出しなさい。

問8 ――線部⑧「北斎の《冨嶽三十六景　山下白雨》に代表されるように、雷そのものを描いたものがいくつか見られるようになります」とありますが、《冨嶽三十六景　山下白雨》では雷はどのように描かれていますか。本文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。

問9 ［　⑨　］に入る語として最も適切なものを、本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問10 ［　⑩　］に入る語句として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　関心　　**イ**　観察　　**ウ**　恐怖　　**エ**　実験

問11 ――線部⑪「現代のマンガなどにも通じる表現」について、生徒四人が調べたことを発表しあっています。この発言の中で一つだけ、マンガと浮世絵との比較において明らかに**違うこと**を言っているものがあります。次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　生徒A「マンガは、西洋絵画と違って、輪郭を重視した描き方をします。くっきりとした線で人物や背景を描くのが、浮世絵とマンガとの共通点です」

イ　生徒B「マンガは、ときに大胆な構図を用います。浮世絵も同じで、どちらも遠近法にとらわれず、強調したいところを大胆に描き出しているのが面白いです」

ウ　生徒C「マンガは、コマ割りと呼ばれる技法で、読む人の視線を誘導します。浮世絵も同じで、構図を工夫することによって見る人の視線を誘導しているそうです」

エ　生徒D「マンガは、雷鳴などについて浮世絵を参考にして文字で効果音を入れることがあります。どちらを見ても、日本語の擬音語・擬態語の豊かさがわかります」

問12 この文章に関する説明として、適切なものには○、不適切なものには×で答えなさい。

ア 筆者は、自身の雷にまつわる体験をもとに話を展開し、雷をあたかも人間のように表現する「擬人化」の手法について詳しい説明を加えている。雷の恐ろしさや不思議さを、人間の感情や経験に結びつけて印象深く語り、雷という自然現象に対する人々の親しみや畏れの気持ちを描き出している。

イ 雷に対する古代の人々の考え方や信仰を、絵画に描かれた雷の表現を手がかりに紹介し、丁寧に読み解いている。絵画という具体的な素材を通して、古代人が雷をどのようにとらえ、またどのような意味を重ねていたのかを掘り起こし、当時の雷に対する認識の特徴を明らかにしている。

ウ 古代人が雷に抱いていた信仰や考え方を、現代の科学的な視点から非科学的なものと位置づけ、その誤りを指摘して修正を求める立場に立っている。雷神や雷に関する信仰を単なる迷信や誤った観念の産物とみなし、そうした古代の思想を批判的に捉えることで、現代的な理解を重視する論調をとっている。

エ 雷に対する人々の考え方が地域や文化によって異なることに着目し、西洋と東洋それぞれの信仰や伝承、また芸術作品の表現方法の違いについて詳しく説明している。文化や伝統に根ざした雷の捉え方を比較し、雷が単なる自然現象ではなく多様な文化的意味を持ってきたことを浮き彫りにしている。

オ 雷にちなむ名前を持つ鳥「雷鳥」が、縁起のよいものとして親しまれ、土産物の包装に使われるようになった理由を探っている。一方で、雷にまつわる伝説の怪物「雷獣」が縁起の悪い存在とされ、土産物のパッケージに採用されていないことを対比的に取り上げ、その背景を説明している。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

四国の小さな島である五木島に住む高校三年の小市航太は、クラスメイトの河野日向子に誘われて、後輩の斎和彦、来島京と共に俳句甲子園というイベント（一チーム五名で創作俳句を競う高校生の大会）に出場することにした。俳句甲子園に出場するためには、もう一人メンバーが必要で、航太は、幼馴染の村上恵一を誘おうと考える。

時刻は午後六時半。恵一の家の夕飯はもうすんでいるはずだ。航太は空腹の頂点だが、そんなことには構っていられない。

「あら、航太君」

おっとりとした声で、恵一のお母さんが迎えてくれた。

「恵一、います？」

するとお母さんは声をひそめる。

「それが、まだ帰ってこないの」

「あれ、そうなんだ」

今日は祝日だ。昼間は出かけているにしても、もう帰っていると思ったのに。

なぜなら、村上家は夜が早い。漁師のお父さんは朝暗いうちに出港するので、夜の八時にはもう就寝してしまうのだ。今の時間帯は一家で夕食を終えて、お父さんが風呂に入っている頃だと思ったのに。この家の習慣なら、航太は自分の家のそれと同じくらいよく知っているのだ。

《中略》

「せっかくだから、航太君、晩ご飯を食べて行ってくれないかしら」
「え、もうお母さんたちは夕食終わってるんじゃないんですか？」
「ううん、それがまだなの。恵一が三年生になってからこんなふうに帰りが遅いので、ついついご飯の時間も遅くなってるんだけど、でもそろそろ始めないと、うちの人、寝る時間になるし……」
「でもそんな、悪いです」
「ううん、ぜひお願いしたいの。航太君、うちの人のお気に入りだから」
まだ帰ってこない息子の代わりのように、航太は恵一のお父さんと食卓で向かい合うことになってしまった。中年太りを気にしている航太の親父と違い、現役漁師は肩も腕も太く、日に焼けた筋肉がかっこいい。体中から潮の香りが漂ってくるようなこの人が、航太は昔から好きだった。
「恵一なんぞ、待たんでいい。さあ、航太、たくさん食ってくれ」
「はい、じゃあ、ご馳走になります」
さすが、漁師の家庭は魚が多い。鯛の刺身、煮つけ、鯛めし。
お父さん、口数は少ないがとっつきにくい人じゃない。漁の話を聞くとか、航太の菓子作りの失敗で笑わせるとかしていれば、①間は持つ。
航太がまだ食べているうちに、酒に弱いお父さんはビール一本でひっくり返り、軽くいびきをかきだした。
「あんた、寝床に行ったほうが」
お母さんが促すとむくりと起き上がり、茶の間から出ていく。
「航太、ゆっくりしていけ」
「あ、……はい」
玄関の戸ががらりと開いたのはその時だった。

「おかえり、恵一」

②お母さんが精一杯明るい声を出したように見えた。でも、恵一は口の中でもごもごと挨拶らしいことをつぶやいただけだ。お父さんのほうは何も言わない。

恵一とお父さんは、廊下で、肩をぶつけるようにすれ違った。どちらも無言。恵一はそのまま茶の間に入ってきて、すわっている航太を見て初めてちょっと表情を動かした。

「お、来てたんだ」

「うん。……ちょっと話があってさ」

「さあさあ、航太君、もっと食べて食べて。ほら、恵一もすわりなさい」

恵一は航太の隣にすわり込むが、何の用かとも聞かない。

——うちの中で、何かまずいことがあったのかな。

ここに恵一と二人だけでいるのなら聞いてみたいところだが、お母さんがいる。一生懸命に話題を見つけようとしてくれているのがわかるので、航太も愛想よく返事を返す。

なんだか、この間の晩の航太の家みたいだ。

食後、二階の恵一の部屋に落ち着いたところで、ようやく緊張がほぐれた。すぐそこは漁港だ。潮風が港の匂いを運んでくる。

「なあ、お父さんと何かあったのか」

すると、意外に素直に恵一は口を開いた。

「進路のことでもめてる。(注1)須賀との面談でおれが大学進学希望って言ったら、親父が怒り狂った」

「あ、恵一、受験するつもりなんだ……」

そりゃそうか。でなけりゃ、あんなに熱心に勉強なんかしてないか。

「とにかく、おれは漁師になるなんてまっぴらだからな」

一人息子が③にべもなくはねつけたから、お父さんも［　④　］のかもしれない。
航太は大きくため息をついた。
「うまくいかないもんだな。うちと逆だ。おれは家業を継ぎたいっていうのに、親父は聞く耳持たないんだから」
「そんなことより、なんだよ、話って」
「あ、そうだった」
航太は今夜押しかけた目的を思い出した。
だが、今はタイミングが悪いかもしれない。どう見ても恵一の機嫌がよくなさそうだから。
このまま帰ろうか。
「⑤うーん、また明日にするわ」
「変な奴」
恵一はそれ以上突っ込もうとはしない。
航太が立ち上がって自分のリュックを肩にひっかけようとした時だ。勢いがよすぎて、恵一の机にリュックがぶつかった。何冊かの本が落ち、そのうちの一冊に挟まっていた写真がのぞく。
「あ……」
恵一がそう声を上げた時には、航太はもうその写真を何気なく拾い上げていた。
ずいぶん古い。今より若い恵一のお母さんと、その陰に隠れるように恵一がいる。二人が乗っているのは小型のボート――釣り舟かもしれない――だ。恵一、まだ小さい。お母さんのズボンのベルトくらいの背の高さしかない。だけど、幼稚園時代からずっと一緒にいる航太が見間違うはずはない。これは十年以上前の恵一だ。
「かわいいな、お前」
そう言ってその写真を恵一に向ける。自動的に、写真の裏が航太の目に入った。

『××年、五月』とメモ書きがされている。
だが、その日付のほかにも、別の、航太がよく知っている筆跡で何か書き添えられている……。
「おい」
あわてたように恵一が写真をひったくったが、航太の目には、全部しっかりと焼きついてしまったあとだった。

⑥手放せる鮎「母」は「舟」に似ている

その写真を、恵一は乱暴に机の引出に放り込む。
「なあ、恵一、今の、お前の俳句だろ」
少し前の航太だったら、あれが俳句とは気づかなかったかもしれない。だが、連日河野と(注2)義貞先生にしごかれている今ならわかる。⑦破調だけど十七音、そして「鮎」は［⑧］の季語。
今のは、俳句だ。
思いがけず、恵一の耳が赤く染まっている。
「見せるつもりはなかったんだ。誰にも。勝手にのぞくな」
航太が黙っていると、恵一はうつむいたままで言葉を続ける。
「偶然、今の写真を見つけたんだ。小学生の頃。家族のアルバムに貼ってあったんだけど、一目見た時、なんだかいやな思い出が頭の中に湧いてきて、だから自分の本の中に隠したんだよ。そうすれば誰も見ないと思って」
「いやな思い出って？　その写真の恵一、たぶん幼稚園か、下手したらもっと小さいよな？」
「それが、よく思い出せないんだ。ただ、あの舟の上でいやなことがあった、それしか覚えていない。たぶん、おれが釣った鮎を、親父に取り上げられて川に放り込まれたんだ」

「せっかく釣ったのに？　どうして？」
「知らないよ、そんなこと。おふくろにそれとなく聞いたけど、何も覚えていないみたいだった」
――お父さんに確かめてはいないのか。
「小学生のおれは、この写真を自分の本の間に隠した。そのままずっと忘れていた。ついこの間偶然見つけたらそのいやな気分がまたよみがえっちまって、それをなんとかしたくて……」
「それで今の俳句作ったのか？」
「ああ。作ったら、おれとしてはもう整理がついたのさ。おれにとって俳句というのはそういう道具だから」
「道具？」
「こうやって句にして、気持ちをすっきりさせる道具だよ。それだけのものさ。だからもういい」
「それだけのもの、か」
⑨航太は自分の気持ちを持て余して、そうつぶやく。「『それだけ』なんて言っちゃうんだ。本当は大事にしているくせに」
航太の声音に何か感じたのか、恵一が顔を上げた。
「どういうことだ？」
自分でも自分の気持ちが全部つかめているわけではない。でもとにかく、航太は全部恵一に話してみようと思った。
「恵一、お前、すごい発想できるんだな。おれ、河野にせっつかれて俳句を作ろうとしているけどさ。いくら頑張ったって、標語みたいなものしかできないんだよ。今の写真、お前ら家族で鮎を釣ってたんだよな。だけど、そこからどうして、『母』は『舟』に似ているなんて、全然関係ないフレーズを思いつくんだよ。おれがやったらきっと、鮎が釣れたら舟が揺れたとか、そんなもんしか作れないのに」
言葉を吐き出しているうちに、航太は自分の気持ちに気づいた。これは嫉妬だ。恵一の頭がいいことはそりゃ、わかっている。でも、自分にできないことをやすやすとやってのけて、しかもその能力を「それだけのもの」で片づける。

腹を立てて当たり前じゃないか。
「航太、何を怒っているんだ？」
恵一は不思議そうな顔をしているが、航太は頬をふくらませて黙り込んだ。
よくよく考えてみれば、恵一に怒るのは理屈に合わない。自分がみじめになるだけだ。でも。
河野の言い分を思い出す。
――⑩もったいない。
今なら、河野のあの言葉が身に染みてわかる。
「おい、恵一、おれたちと一緒に俳句を作れ。俳句甲子園に行くぞ」
「はあ？」
恵一があっけにとられた声を出す。「お前まで何を言い出すんだよ、河野みたいに」
「今なら河野の考えがもっともだとわかるんだよ。お前の才能、もったいない。おれたちがその才能を必要としているのに⑪御託を並べて拒否するなんて、ずうずうしい」
「ずうずうしいって、お前……」
「いや、言い方が悪かった。頼む、お前のその才能がほしい」
「待てよ、航太」
恵一がすわり直す。ようやく、航太が本気だということは飲み込めたようだ。
「航太が勝手に参加するのはいいさ。だが、おれを巻き込むな」
「いいじゃないか。できないことをやれって言ってるんじゃない、お前ならできるから力を貸してくれって頼んでるんだ。どうしてそこまで意固地になるんだよ」
「意固地なのはそっちだ」

恵一は指を突きつけた。「そんなにわからないなら、一度だけ説明してやる。おれの俳句はおれだけのものだ。みんなで語り合うものじゃない。俳句甲子園、お前は知らないだろうが、おれは散々見ているんだよ。句を真ん中に置いて、ああだこうだ、作者でもない奴らが言いたいことを言い合う。それに審査員という名の俳人が点数をつける。でもな、その審査員の点数だって、時には同じ句に六点つける俳人と九点つける俳人がいるんだよ。そんな評価のどこに客観性があるって言うんだ？　あんな試合仕立ての内容に納得なんてできやしない。おれの俳句に他人が勝手な解釈をするなんて、願い下げだ」

「自分の俳句に他人が勝手な解釈をするな、か」

今までの航太なら、そこで引き下がっていたのかもしれない。だが今は違う。今日、体験したじゃないか。

航太にはわからなかった航太の句のよさを、仲間が見つけてくれた。

恵一には、俳句の才能がある。物知りだから、航太の知らないこともたくさん知っているだろう。でも知らないことだって、航太が気づかせてやれることだってあるはずだ。

京に俳句をするように説得した時、河野が俳句の可能性に気づかせたように。

――そうだ、あの時、河野は京に何を持ちかけたんだっけ？

航太は恵一に詰め寄った。

「なら、恵一、おれと賭けをしろ」

「賭け？　どんな？」

「さっきの句に、恵一の思いもつかないような解釈をしてやる。で、その解釈も勝手じゃない、ありだとお前に納得させる。それはつまり、⑫お前の句がお前だけのものじゃないと証明するってことだろう？　それに成功したら、おれたちが新しい鑑賞を見つけたら、こっちの勝ちだ。おれたちの仲間になれ」

恵一が言い返した。

「おれが勝ったら？」

「うちの親父と斎神社の義貞先生に、お前のお父さんの説得を頼んでやる。進路について、恵一の言い分も聞いてやってくれって」

斎神社の神職は、島の有力者だ。人生相談に訪れる島民も多い。先代神職義貞先生の言うことなら、恵一のお父さんも無下にはできないだろう。そして、航太の親父。航太と恵一は幼馴染だが、航太の父と恵一の父は、小学校、中学校、高校を通しての先輩後輩の間柄なのだ。航太の父のほうが二歳上。島の大人は、先輩後輩の上下関係には厳しい。

恵一もそのことはよく知っている。だからだろう、うなずいた。

「わかった。だが、いいか、おれが納得するのが条件だからな」

（森谷明子『南風吹く』〔光文社文庫〕より）

（注1）須賀――航太、恵一の担任教師。

（注2）義貞先生――斎和彦の祖父で、神社の先代の神職。俳句甲子園に出ようとしているメンバーに俳句の指導をしている。

問1 ――線部①「間は持つ」・③「にべもなく」・⑪「御託を並べて」について、その意味として最も適切なものを次の各群の**ア**～**エ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「間は持つ」

ア 馴れ馴れしくならずに済む　**イ** 申し訳なく思う必要がない

ウ 怒らせたりしないでいられる　**エ** 悪くない雰囲気で時間が送れる

③「にべもなく」

ア むやみに　**イ** そっけなく　**ウ** あっさりと　**エ** ひたすらずっと

⑪「御託を並べる」

ア 自分勝手で偉そうな言葉をくどくどと言う　**イ** 余計なことをいろいろ言って時間をつぶす

ウ 人から伝え聞いたことを無責任にしゃべる　**エ** 全てを理屈で押し通そうとして難しく話す

問2 ――線部②「お母さんが精一杯明るい声を出したように見えた」とありますが、「お母さん」が「精一杯」の「明るい声」を出したのはなぜだと考えられますか。その理由として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 帰りの遅い恵一に対する航太の苛立ちや怒りを少しでも静めたかったから。

イ 恵一が帰宅したため自分一人で航太の相手をする必要がなくなり、安心したから。

ウ 恵一と父親との対立から生じる家の中の悪い雰囲気を少しでも和らげたかったから。

エ 恵一の帰宅が遅いことを叱りたかったが、友達の前なのでここではやめておこうと考えたから。

問3 ④ に当てはまる語として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　頭に血が上った　　イ　顔から火が出た　　ウ　腕に覚えがあった　　エ　足が地に着かなかった

問4　――線部⑤「うーん、また明日にするわ」について、次の問いに答えなさい。

(1)　なぜ「明日にするわ」と言ったのですか。その理由を分かりやすく説明しなさい。

(2)　結局航太は、翌日に延ばすことなく話をしていますが、その変化は具体的に何を見たことがきっかけになったのか、二十字以内で答えなさい。

問5　――線部⑦「破調だけど十七音」の俳句の例として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　海暮れて鴨の声ほのかに白し　　芭蕉

イ　大根引き大根で道を教へけり　　一茶

ウ　冬蜂の死にどころなく歩きけり　　鬼城

エ　遠山に日の当たりたる枯野かな　　虚子

問6　⑧ に当てはまる季節を、漢字一字で答えなさい。

問7　――線部⑨「航太は自分の気持ちを持て余して」とありますが、この場合、「自分の気持ちを持て余す」とはどういうことですか。「言葉」という語を必ず用いて、《**自分の気持ちを……、ということ。**》という形でわかりやすく説明しなさい。

問8 ――線部⑩「もったいない」とありますが、この場合、「もったいない」とはどういうことですか。それを説明した次の文の空欄 X ・ Y に当てはまる言葉を、どちらも漢字二字で答えなさい。

恵一は俳句を詠む素晴らしい X を持っているのに、それを使って詠んだ作品を Y しないでいる、ということ。

問9 ――線部⑫「お前の句がお前だけのものじゃない」とありますが、これはどういうことですか。説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作品は、ひとたび公表されたら社会の共有財産となるのが常識なので、通常、作者が思ってもいなかったような形で社会に認知されることになる、ということ。

イ 良い作品というのは世の中の多くの人々が共感できる力を持っているものであり、作者の個人的な経験が元になっていても、その人の作品だとは言い切れない場合がある、ということ。

ウ 作品の表現意図は作者だけが分かるものなのだが、作者の思い込みや勘違いは作者以外の人によって改められるものなので、結果的に作品の本当の価値は他者によって明らかになる、ということ。

エ 作者の表現意図ももちろん大事なのだが、作者以外の他者が、作者でも気づかなかったような読みや解釈をして、作品に新たな生命を吹き込んだり価値を与えたりできる場合がある、ということ。

問10 ――線部⑥「手放せる鮎『母』は『舟』に似ている」について。以下は、この小説を学んだ中学校の授業でのやり取りです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

先　生：「母」と「舟」とに関しては、吉野弘という詩人の詩の中に、

母という字は

舟に似ている。
すこし傾(かたむ)いた小舟のよう。
愛の荷物を積みすぎているせいでしょうか。

というフレーズがあります。この詩のフレーズも参考にして、「母」と「舟」とでどんなところが似ているのか皆さんで話し合ってみてください。

生徒A：単純に字の形が似ているよね。

生徒B：吉野弘の詩の「すこし傾いた」に着目すると、海に浮(う)かぶ実際の舟は波に揺られて傾くことが多いし、「母」という漢字は、縦線を斜(なな)めにして平行四辺形のように書くよね。

生徒C：小説の、俳句になった場面では、ボートで幼い恵一にしがみつかれて母親は、少し体勢を崩(くず)して体が斜めになっているかもしれない。

生徒D：字の形が似ているのは勿論(もちろん)だけれど、吉野弘も小説の中の恵一も、字の形だけではなくもっと大きな類似を感じ取っているのではないかしら。

生徒A：どういうこと？

生徒D：自然の大きな力の前では、母親も舟も、小さくて頼りないものなのかもしれないけれど、「［　X　］母親」と「［　Y　］舟」という、存在そのものの本質が似ている、ということです。

三　人：ああ、確かに！

先　生：とても良い議論ができましたね。

問　**生徒D**のセリフの空欄(くうらん)［X］・［Y］に入る言葉の組合せとして最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　X＝「子供の成長を促す」　Y＝「乗り手の進歩に手を貸す」

イ　X＝「子供の行為(こうい)の全てを受(う)け容(い)れる」　Y＝「乗り手の生命の全てを守り切る」

ウ　X＝「子供が全幅(ぜんぷく)の信頼(しんらい)を寄せ身を委ねる」　Y＝「乗り手が自分の身の安全を委ねる」

エ　X＝「子供に社会や世界を見せてくれる」　Y＝「乗り手の眼前に様々な景色を展開する」

三　次の各問いに答えなさい。

問1　次の①～⑤の文の――線部の**カタカナ**を適切な漢字に直しなさい。

① 冷暖房(れいだんぼう)が**カンビ**された施設(しせつ)。

② **リュウガク**生を積極的に受け入れる。

③ 二国間で経済連携(れんけい)**キョウテイ**を結ぶ。

④ **ハクブツカン**で恐竜(きょうりゅう)の化石を展示する。

⑤ 満十八歳(さい)以上の国民が**ユウケンシャ**となる。

問2　次の①～⑤は、二字の熟語とそれとほぼ同じ意味を表すカタカナ語を示しており、A・Bの空欄(くうらん)□には、それぞれ同じ漢字が入ります。当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

① A □道 … ジャーナリズム　B □情 … インフォメーション

② A 目□ … ゴール　B □準 … スタンダード

③ A 奉(ほう)□ … サービス　B □事 … ビジネス

④ A 個□ … キャラクター　B □差 … ジェンダー

⑤ A 演□ … パフォーマンス　B □術 … テクノロジー

以下余白